

よろずは

平成二八年

一月号

歌碑めぐり 15

今回ご紹介する歌碑は、福岡県福岡市内で最も古い歌碑です。明治二一年（一八八八）に三條實美さんじょうさねとみによって揮毫きごうされ、翌年に建碑されました。『万葉集』巻六の九五七番歌、九五九番歌の三首が題詞・詠み人とともに刻まれています。歌は神龜五年（七二八）に香椎宮へ参拝した帰りに馬を香椎の浦に停めて、大伴旅人・小野老・宇努首男うののおひとおひと人がそれぞれ詠んだものです。

いざ子ども香椎の瀉かしのに白妙の袖さへぬれて朝菜摘みてむ

（さあみんな、香椎の干瀉かしのに白妙の袖までも濡らして朝の菜を摘もうではないか）
時つ風吹くべくなりぬ香椎瀉潮干の浦に玉藻刈りてな

（満潮みづうしほどきの風が吹きそうになっている。香椎瀉の潮干の浦に玉藻を早く刈りたいことよ）
行き帰り常に見し香椎瀉明日ゆ後には見む縁も無し

（行きにも帰りにも、いつも見て来た香椎瀉を、明日から後には見るすべもないことだ）
一首目第四句は「袖左倍沾而」となっていますが、主要な写本では「倍」と「沾」との間に「所」や「」の文字が入ります。現在、歌碑の建つ香椎頓宮は市街地となっていますが、昭和初期までは遠浅の浜を見渡すことができたそうです。

【万葉古代学係】

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。

碑文の翻刻

※篆額に「名區舊微」

神龜五年冬十一月太宰官人等奉拜

香椎廟訖退歸之時駐馬于香椎浦各述懷作歌

帥大伴卿歌一首

去來兒等香椎乃瀉爾白妙之袖左倍沾而朝菜採手穴

大貳小野老朝臣歌一首

時風應吹成奴香椎瀉潮干訥爾玉藻茹而名

豊前守宇努首男人歌一首

往還常爾我見之香椎瀉從明日後爾波見縁母奈思

明治二十一年三月 内大臣三條實美



（福岡県福岡市／香椎頓宮）